

Title	シェイマス・ヒーニー：ポリフォニーの中の実在
Sub Title	Seamus Heaney : the reality in polyphony
Author	広本, 勝也(Hiromoto, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.38 (2001. 3) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	<p>Seamus Heaney makes extensive use of language from Anglo-Saxon literature to his indigenous Irish culture so that his poems can be made into the art of polyphonic resonance. In this article I would like to explore the characteristics and core ideas of his poetry. Concerning the poem titled "Digging," which seems to be the mani-festo of his literary career, people may consider that the word "gun" isn't well connected to the imagery of the rest of the poem, which describes the work on the potato field and the bogland. Yet, in fact, his father uses a tool which he refers to as "the bright edge" and his grandfather is seen "nicking and slicing" with "the curt cuts of an edge,/Through living roots." Giving a unifying imagery to the poem, these tools are symbolic of the weapons they wield for livelihood, and in the eyes of Heaney as a small boy his father and grandfather were identified as semi-heroes. Using the "pen" as his means to make a living and to articulate in society, the grown-up poet lives his life in different circumstances from those familiar to his ancestors. Although using different implements, the poet hopes to achieve something heroic by digging the field of literature in order that he may live up to the models,i.e. his father and grandfather whom he used to find heroic in his early days. As in this work, the word "bogland" presents us with a key to understand another poem called "Act of Union." The poet gives us a picture of Ireland's situation after the law (Act of Union) was introduced in 1800 by England. Not only topographically but politically he depicts the stormy landscape, which gives us an insight into the agony of the Irish people. We can note that his use of language is sensuous, in portraying the political predicament of his home country in a kind of sexual metaphor. In connection with politics the elegy "The Strand at Lough Beg" claims our particular attention in the way it deals with death in daily life involving the political conflicts. Like Milton's Lycidas this poem asks a question about God's will and justice, and finally leads to the rebirth of hope and life. However, in `Part VIII' of "Station Island" in Station Island his late cousin Colum McCartney's ghost calls in question the value of the conventional elegy, accusing the poet for the way he composed "The Strand at Lough Beg." It reminds us of the comments about Milton's Lycidas by Dr. Johnson, who blamed him for creating fiction and lacking in grief. Considering the above, one can see that Heaney debates within himself and combines the vernacular with the English language. In this way he attempts to redress the imbalance of the actual world, which culminates in the polyphonic use of the language and reveals reality in accordance with "auditory imagination."</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20010331-0001

権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シェイマス・ヒーニー

——ポリフォニーの中の實在——

広 本 勝 也

序

1998年6月23日午後3時から、オックスフォード大学・大学講堂シェルドーン・シアターで、詩人 Seamus Heaney の講演「透かし彫り——『ベオウルフ』の現代語訳について」(“Fretwork: on translating *Beowulf*”)があり、滞英中の筆者は幸運にもこれを聞くことができた。この時彼は59歳、すでに1995年ノーベル文学賞を受賞し、'97年オックスフォード大学から文学博士の学位を授与されて、知的なオーラを漂わせていた。同時に、大地に根を下ろすかのごときがっしりした体格で、いかにもアイルランドの農家に育ったという土性骨のようなものが感じられた。

この講演で、まずヒーニーは、タイトルの“Fretwork”に、“My soul frets in the shadow of his language.”という、ジェームズ・ジョイスのことばへの引喩が含まれていることを告げた。これは『ベオウルフ』を現代英語に訳す時に、古英語の影響を受けながら、自分の魂が思い悩みつつことばを紡ぎ出す過程で、一種の文様が生まれ、詩が少しずつ訳出されていくということであろうか。『『ベオウルフ』の翻訳を始めるにあたって、自分がこの言語に生まれ、この言語が自分のなかに生まれたのだ、と自身に言い聞かせなければならなかった。』『『ベオウルフ』の翻訳者は、古英語の詩行の入り組んだ文様や形態を扱い、強弱のリズムや頭韻による定型を考慮しなければならない。』『さらにもう一つの文様は、現代英語の翻

訳者が、古英語という言語それ自体の重さと厚みに直面したときに出くわすものである」と彼はいう。

ヒーニーが Old English を習ったのは、ベルファーストにある Queen's University の学部学生だったときで、スコットランド人の先生から教えられたそうである。「わたしにとって、英語の歴史や古英語の詩・散文の研究は、自国語の保持に自信を持つ上で重要だった。人々は言語が、歴史的に蓄積された貯えであることを認識すればするほどいいのだ」とヒーニーは言っている。「ソーン」というルーン文字を含む、古い英語の詩と取り組むことで、自国文化の根底にあるものを探してみたい、土着のことばとともに自分が生きていることを確認しながら、英語をさらに豊かなものにしていきたい、という抱負が彼にはあるようだ。

ところでヒーニーによれば、「言語地図の或る場所に、境界線のないことばの国」があるという。「そこで精神は自分の言語が、単に民族性の徽章——文化的な卓越性やお役所的な押し付けの問題ではなく、未来の言語への侵入となるような領域への逃げ道、抜け穴を見出します。わたしは『ベオウルフ』でも、こうした抜け穴の一つについて出くわしたのです。』『ベオウルフ』の翻訳に取り掛かって、ヒーニーは作品を書いた詩人の声——言語学的な意味だけでなく、メロディを内なる耳で聞き取ろうとする。この過程で原作者の声の背後から聞こえてきたのは、「広大な畑で玉蜀黍と一緒に刈り取ったこともある」親戚の一人の声だった。「荘重な古英語のことばに匹敵するこの声が聞こえてこなかったら、翻訳に着手することはできなかったでしょう。スカリオンという姓の父方の親戚で、地元の親しい人ですが、彼の声がすぐに聞こえてきたのは幸いでした。」「よし、これでいこう」とヒーニーは思ったとのことである。(付言すると、後述の詩「ベグ湖の浜辺」では、「スカリオン」は普通名詞として使われており、「台所での皿洗いなどの下働き」をするキッチン・スタッフの意味である。)

ヒーニーはイギリス的な文化を反映したことばとともに、生まれ育った

アイルランドの環境に根差すことばを用いて、作品を幅広いものにしていく。彼の詩を読んでみると、様々な音声が聞こえてくる。現代アイルランドの抱える諸問題に直面しながら、多重な旋律を響かせている作品を幾つか取り上げて、そのなかに潜む中心的なものが何であるかについて考えてみたい。

I

まず、詩集『あるナチュラルリストの死』(*Death of a Naturalist*, 1966)の巻頭に収められた作品「掘る」(“Digging”)を読んでみることにしよう。この詩の情景として、最初に、書斎にいる現在の詩人、次に子ども部屋にいる過去の自分、その後、窓から見える畑、そこでジャガイモを掘っている父親、さらに遠い過去の光景として、アイルランドの沼沢地帯で、泥炭土 (“turf”) を掘り起こしている祖父、そして再び現在の詩人——などが描き出されている。この作品では、どんな音が聞こえてくるだろうか。初めに内耳に届くのは、さらさら紙の上を走るかすかなペンの音である。そしてペンは、扱い慣れた「銃」(“a gun”) にたとえられているので、いつ弾丸が発射されるかも知れぬ射撃の音の連想を伴っている。

次に、父親が土を掘って、ジャガイモを取り出す時のざらざらした音，“a clean rasping sound” が聞こえる。詩にリズムがあるように、鋤を使って身体を動かすその作業にもリズムがある。

この詩を少しく引用し、そこに内在する思想と感情について分析することにしてしよう。

Stooping in rhythm through potato drills

Where he was digging.

リズムカルに身をかがめ、ジャガイモ畑の畝を通っていく

親父が掘るときの様子

と書かれており、詩的営為と農作業が何かを掘り起こし、作り出す行為として関連づけられている。

さらに、トナーの沼地で祖父が、背筋を伸ばしてゴクゴク牛乳を飲む時の音 (“He straightened up / To drink it”), そのあと「はじめじめしたピートのぐちゃぐちゃ、ぴしゃびしゃしたもの」 (“the squelch and slap / Of soggy peat”) を束ねていく音なども聞こえる。

最後に、焦点は書齋で詩を書く詩人のペンに戻る。

ペンは冒頭で銃にたとえられているように、武器のイメージを喚起する。敵を倒したり、人間や動物の血を流す恐ろしい武器であるが、このあと畑仕事の光景が続き、「銃」との関連性が薄いのではないかと、思える。しかし、鋤は “the bright edge” (光る刃) を持っている。また、“Nicking and slicing neatly,” (きちんと土に刻み目をつけ、切っていく) とか “the curt cuts of an edge / Through living roots” (生きた根を通ってきた、鋤の刃のそっけない切り口) などの箇所にも武器のイメージが確かに持続しており、生活との闘いを象徴しているとも言える。また「鋤はペンよりも強し」というアイルランドのことわざがあるらしいが、農民一揆の時には、鋤がペンよりも強力な戦い的手段となることは疑い得ない。だが、大人のヒーニーにとって、鋤ではなくペンが生計を立てるための道具であり、社会と対峙する武器としても有効なのである。

しかし、この作品では、全体的にこうした武器のイメージは希薄であり、鋤もペンも収穫や生産という肯定的な文脈のなかで使われている。そして、ヒーニーの祖父がどろどろした大地から泥炭を切り取って束ねていくように、詩人はぐちゃぐちゃした混沌状態の中から、ことばによって詩的なイメージを切り取り、人生の断片に明確な形態を与え、作品として残していく。従って焦点となるのは、「泥炭」 (“bog”) であり、“bog” は祖父にとっての労働の場であるだけでなく、ヒーニーにとってはことば以前の原初的なカオスを象徴するものとして、精神上の活動の場であり、彼の主たる “preoccupations” (関心事) の一つである。子供時代のヒーニーに

とって祖父や父親は、半ば英雄だった。一方、高等教育を受けてしまった大人のヒーニーは、彼らと違って野良仕事に携わることができない。親の世代との断絶はあるが、この作品のなかで、鋤とペンという生産手段に共通するものを見出し、収穫のイメージによって親たちとの連続性を確立している、といえよう。

II

カトリック系ナショナリストとプロテスタント系ユニオニストとの抗争のなかで、ヒーニーはアイルランドの政治的現実をどのように受け止めているのだろうか。詩集『北』(*North*, 1975) に収められた「連合法」(“Act of Union”) は、民族の抱える苦しみを反映し、ここでも「沼沢地」(“bogland”) がキーワードになっている。まず、タイトルは、仮象としての平和のなかに存続する、相互対立と依存の関係に伴う不協和音を集約している。アイルランドでは、1798年の反乱の結果、1800年イングランドの議会で、「連合法」という法律が制定された。こうして英国とアイルランドが合体し、新しいイギリス、つまり連合王国 (The United Kingdom of the Great Britain and Ireland) が生まれたのである。

さて、作品の初めから4行目まで、雨が勢いを増し、沼があふれ出ようとしている光景がある。荒れ模様の湿地帯の様子だが、単に“topographical”なものではなく、妊娠させられた女性の身体のイメージがある。地誌的でもあり、性的でもあるイメージが続き、5行目で、「お前の背中東沿岸の堅い線であり、緩やかな丘を越えて、お前の腕と足は投げ出されている」という、語り手の声が聞こえてくる。「お前の」と呼び掛けるこの語り手は、誰だろうか。これはアイルランド人にとって、想像の中の「父親」であり、母なるアイルランドの大地を侵すイングランドだ、ということになるだろう。

I am the tall kingdom over your shoulder

That you would neither cajole nor ignore.
 Conquest is a lie. I grow older
 Conceding your half-independent shore . . .

俺はお前の肩に覆い被さる丈の高い王国
 お前が甘言でだますことも、無視することもできない相手なのだ。
 征服とは虚言だ。俺は歳を取っていく、
 お前の半ば独立した状態を認めながら……

イングランドは「連合法」という暴力的な手段で、有無を言わず、アイルランドを妊娠させた、恐ろしい雷親父なのかもしれない。その結果、アイルランドが受けた激しい傷は、まだ癒されていない。Neil Corcoran がいうように、「この詩の結末は絶望と疲労であり、『苦痛』や『再び』ということばの押韻が、アイルランドの歴史における、終わりそうもない政治的苦難を強調している」のである（“Its conclusion is hopeless and exhausted, the rhyme of ‘pain’ and ‘again’ insisting on the apparent endlessness of political suffering in Irish history.” *The Poetry of Seamus Heaney*, p. 78）。このような政治的状況を性的なメタファーで描出し、“sensuous”な表現を可能にするところにヒーニーの真骨頂が窺われる。

III

ヒーニーの作品には、死者への哀悼を主題とする詩が幾つかある。例えば「中間休み」（“Mid-Term Break”）には、4歳で亡くなった弟クリストファーの死への哀悼がある。また、「死産胎児への追悼歌」（“Elegy for a Still-born Child”）では、期待に反して「失われた世界」についての心の痛みを歌っている。これらの詩は個人的な死についての瞑想だが、詩集『野外観察』（*Field Work*, 1979）に収められた1編「ベグ湖の浜辺」

(“The Strand at Lough Beg”) は、政治と無関係ではあり得ない、日常生活のなかの死を扱うものとして注目に値する。

この詩は、アイルランドの内紛に巻き込まれて殺害された、従兄弟コラム・マカートニーの死を悼んで書かれたものである。従兄弟はアーマー市の大工で、政治に関与したことはなかった。ダブリンでサッカーの試合を見た後、家に帰る途中の出来事だった。ダンテ「煉獄編」の引用後、ガソリンスタンドという、日常的な現代風景が1行目に出てくる。コラム・マカートニーは、車で野原から山道に入り、フェーズ山脈を通り抜けていく。アイルランドの神話的な人物スウィーニーが、物の怪たちに襲われた所に差し掛かったところで、彼は覆面した者たちに「止まれ」と合図される。

第2連は、フラッシュバックの手法で、事件前ののどかな田園風景に戻る。生前のマカートニーがふだん親しんでいた光景である。千寿菊(“marigolds”)やイグサ(“bulrushes”)や雌牛(“cow”),そして仲間たち、さらに「大きな声の皿洗い連中」(“Big-voiced scullions”)や家畜番、牧童たちへの言及があり、これらの植物や動物や人々は、マカートニーの日常生活の持続を象徴する存在となっている。

第3連でも、日頃慣れ親しんだ牧歌的な情景が続く。朝靄のかかった牧場で、牛が草を食んでいて、露に濡れた菅の中をマカートニーと詩人は進んでいく。ベグ湖が研ぎ澄まされた刃を持つ鈍い刀身のように、霞みのなかで輝いている——この光景は、想像のなかで組み立てられた思い出のなかの一齣であろう。とつぜん詩人は、はっと我に帰ったように凄惨な場面、恐ろしい現実と直面する。従兄弟は血と泥にまみれて両膝をついて死んでいるのである。

詩人は死者とともにひざまずく。そして「低く垂れこめる雲から取った霧雨のような柔らかい苔」で、従兄弟の身体をふいて、「新緑の葉を伸ばしているイグサで肩衣」を編んでやる。

この詩を読んで気付くのは、古典的なエレジーの響きである。自然も哀悼の儀式に参加して、悲しみを詩人と共有しているようであり、ベグ湖が

明るい光を反射するのではなく、憂鬱な「鈍い光」を放っており、「刀身」にたとえられているのは無気味である。牛たちは霧の中で無心に草を食んでいるが、菅は涙のような「露に濡れて」悲しげにきしむ音を立てている。このあたりは、17世紀の詩人ジョン・ミルトンの哀悼歌『リシダス』を反響させているのかもしれない。

And when they list, their lean and flashy songs
 Grate on their scannel Pipes of wretched straw,
 The hungry Sheep look up, and are not fed,
 But swoln with wind, and the rank mist they draw,
 Rot inwardly, and foul contagion spread :

そして、くだらないへぼ詩人たちは、
 気が向けば、つまらぬ退屈な歌を
 惨めな藁の哀れな葦笛にきしらせる。
 飢えた羊は顔を向けるが、餌は与えられず、
 悪いガスと、吸い込む饑えた霧で膨満し、
 内部から腐っていき、悪疫を撒き散らす。 (Lycidas, 123-27)

『リシダス』の弔問客の一人ペテロは、このようにイングランド国教会内部の腐敗を告発している。が、ヒーニーは、「鞭を鳴らす」(“crack the whip”) ことも「いまを楽しむ」(“seize the day”) こともできないと言って、戦いへのためらいを表現している。そしてアイルランドの軍事的紛糾を批判するのではなく、控えめに疑問を投げ掛けている。「なぜ従兄弟が犠牲になったのか、なぜ平和な日常生活が、とつぜん断ち切れなければならないのか」と。『リシダス』に見られる激しい糾弾はないが、神の意志はどこに存在するのか、正義に基づく裁きはあるのか、という問いを潜ませていることが読み取れる。

ミルトンは亡くなったリシダス（学友エドワード・キング）を「浜辺の守護神」（“the Genius of the shore”）に神格化し、キリスト教的な慰めを見出しつつ、「さわやかな森，新しい牧場」（“fresh Woods, and Pastures new,” 193）に向かう。ヒーニーも想像のなかで「みどりの肩衣」を編んで、明日の社会——アイルランド民族主義の再生を象徴させ、作品を慰めと希望の結末へと導いていく。

IV

伝統的なエレジーの特徴は、価値あるものが失われたことについての瞑想だが、はたして死者を弔う行為として、これが現代でも有効だ、といえるだろうか。詩集『巡礼の島』（*Station Island*, 1984）に収められた作品“Station Island”の‘Part VIII’では、ヒーニーはこのような問いに付きまといられている。亡くなった従兄弟コラム・マカートニーとの対決を迫られ、亡霊である彼から苦言を呈される破目になるのだ。

この詩の背景は、ドニゴール州 Lough Derg（ダーク湖）の中央部ステーション島にある修道院の跡地である。詩人は聖ブリジッドの墓所にやって来て、Irish Catholic の多くの巡礼者たちと一緒にいるのだが、夢現のなかで亡霊たちに出会う。32歳の若さで亡くなった友人の考古学者トム・ドレーニーの亡霊が消えた後、泥にまみれ、血を流して青い顔をしたマカートニーが現れる。従兄弟はこう愚痴っぽく語り掛ける。

「日曜日、ぼくが殺されて、フューズ山脈からベラヒーに運ばれている間、きみは詩人たちと共にいて、ことばをひねり出していたんだ。」

‘You were there with poets when you got the word
and stayed there with them, while your own flesh and blood
was carted to Bellaghy from the Fews.’

そして「作品化されたものは事実ではない」（‘You saw that, and you

wrote that—not the fact.）と言う。「ぼくが直接的に咎めるのは、ぼくの頭を撃ちぬいたプロテスタントだが、間接的には、この修道院にやってきて贖罪を求めているらしいきみを非難しているんだよ。きみが醜悪なものを隠蔽し、『煉獄篇』のきれいなブラインドを下ろしたことや、ぼくの死を朝露という人口甘味料で味付けしたやり方に対して。」

‘The Protestant who shot me through the head
I accuse directly, but indirectly, you
who now atone perhaps upon this bed
for the way you whitewashed ugliness and drew
the lovely blinds of the *Purgatorio*
and saccharined my death with morning dew.’

ヒーニーに対する亡霊の不満は、ミルトンの『リシダス』についての Dr. Johnson の批判を思い起こさせる。「『リシダス』は虚構であり、真実の悲しみではない」（“Where there is leisure for fiction, there is little grief.”）と、ジョンソン博士は『英国詩人列伝』（*Lives of the English Poets*, 1779-81）のなかで、ミルトンのエレジーに対して否定的な評価をしたのである。

ヒーニーの心の中では、死者たちや、いま眼前に存在しない他者との絶えざる対話がある。その内なる糾弾・弁明のなかで、問題になるのは、詩を書くという行為に関する疑問である。特に、この作品ではエレジーという文学行為が、妥当であるかどうかを取り上げられており、読者もマカートニーによる罪状告発を突きつけられている。「ベグ湖の浜辺」の読者が、その作品を読んで感動したとすれば、作者と同じ罪を犯していることになるのだ。「巡礼の島」のマカートニーの批判は、現実を容認しながら、自分は罪を免れていると思っている読者——ボードレールのことばを借りれば、「偽善的な読者」（“Hypocrite lecteur”）——の責任を問うものであ

ろう。換言すれば、ヒーニーのペンは、想像裡のマカートニーという亡霊の存在を通じて、わたしたちに向けられた虚偽意識を標的とする「銃」(“gun”) になっているのである。

結 語

以上、ヒーニーの作品数編を読んで、その特徴について考えてみた。彼は2年余り前のオックスフォードの講演で、次のように話した。「今日の作家たちは、地方語や自国語を英語の多声化のためにふんだんに用いるようになった」(“Many writers celebrate the use of their local, native languages as a polyphony of English.”), そして『ベーオウルフ』などのAnglo-Saxon Literatureは、多次元の文化に歴史的な基礎を与えてくれる」のだ、と。ヒーニーはこうして言語を豊富化し、作品に歴史的な深みを与えながら、絶えず自己検証を続けている。心に響いてくるものを「政治的、文化的な綱領のために抹殺するのは、文学者としての聴覚的な想像力への違反となる」(*The Redress of Poetry*, p. 8)。このような考えのもとに、彼は政治的な思想や主義にとらわれることなく、詩の自律的な法則に従い、現実の引力に抵抗して、外部世界の不均衡を是正しようと試みる。ポリフォニックなその芸術の中に実在しているのは、文学の価値を信じるヒーニーの真摯な熱情であり、これが彼の力強い詩行を湧出させる、言語的なエネルギーの源泉になっている、とすることができる。

*本稿は、平成12年11月11日、同志社女子大学・今出川キャンパス頌美館で開催された日本現代英米詩学会・第13回大会での研究発表に基づいています。ご質問・ご意見をいただいた先生方から学ぶところ多かつたことを記し、感謝申し上げます。

REFERENCES

TEXTS

- Heaney, Seamus. *Death of a Naturalist* (London: Faber and Faber, 1966)
- . *Station Island* (London: Faber and Faber, 1984)
- . *New Selected Poems 1966-1987* (London: Faber and Faber, 1990)
- , tr. *Beowulf* (London: Faber and Faber, 1999)
- . *Preoccupations: Selected Prose 1968-1978* (London: Faber and Faber, 1980; 1985)
- . *The Redress of Poetry* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1990)
- Randall, James. "An Interview with Seamus Heaney," *Ploughshares*, vol. 5, no. 3 (1979), 7-22.

CRITICISM

- Bloom, Harold, ed. *Seamus Heaney* (New Haven: Chelsea House Publishers, 1986)
- Hart, Henry. *Seamus Heaney: Poet of Contrary Progressions* (Syracuse: Syracuse Univ. Press, 1992)
- O'Donoghue, Bernard. *Seamus Heaney and the Language of Poetry* (New York: Harvester Wheatsheaf, 1994)
- Murphy, Andrew. *Seamus Heaney* (Tavistock, Devon: Northcote House Publishers, 1996; 2000)
- Corcoran, Neil, *The Poetry of Seamus Heaney* (London: Faber and Faber, 1998)
- Andrews, Elmer. *The Poetry of Seamus Heaney* (Duxford, Cambridge: Icon Books, 1998)
- Vendler, Helen. *Seamus Heaney* (Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press, 1998)

邦語文献

小野正和, 清水重夫『ナチュラリストのパラダイム』(書肆山田 1993)

村田辰夫ほか訳『シェイマス・ヒーニー全詩集1966~1991』(国文社 1995)

———.『水準器』(国文社 1999)

水之江有一『現代アイルランド・イギリス詩学』(多賀出版 1997)

橋本横矩『シェイマス・ヒーニー——現代アイルランドの精神』(国文社 1998)

永野珠美「失われた中心を求めて——シェイマス・ヒーニーのエレジー」(岩永, 植月編『論集「イングリッシュ・エレジー」』音羽書房鶴見書店 2000)

附 録

シェイマス・ヒーニー 年譜

- 1939 4月13日、北アイルランド、デリー州の農場モスポーンに、父パトリックと母マーガレットの長男として出生。
- 1945-51 アナホリッシュ初等学校に通学。
- 1951-57 デリー州、聖コロンバ校に奨学金給費・寄宿生として在学。
- 1957-61 ベルファーストのクイーンズ大学で英語・英文学を専攻。
- 1961-62 教職に就くため、ベルファーストの聖ヨセフ教員養成学校に学ぶ。
- 1963-66 同校英語講師。この頃、英文学講師で詩人のフィリップ・ホップズバウムが主宰する詩人たちの会「グループ」に参加。
- 1965 マリー・デウリンと結婚。
- 1966 詩集『あるナチュラルリストの死』(*Death of a Naturalist*) 出版。
- 1966-72 クイーンズ大学で、現代文学の講師。学生たちの中に、ポール・マルドゥーン、フランク・オームズビーなどがいた。
- 1970-71 米国カリフォルニア大学バークレー校客員教授
- 1972 南アイルランド、ウィックロー州グランモアに移住。ヒーニーはベルファーストを去ったことについて、「自分の確立した生活のリズムから脱け出したかった」と言っている。
- 1975-81 ダブリンのキャリスフォート師範学校講師
- 1976 ダブリン近郊のサンディマウントに転住。
- 1979 米国ハーバード大学客員教授
- 1982 5年契約で同教授に就任。年間1学期の授業を担当。
- 1988 オックスフォード大学詩学教授に就任。5年契約。年間1学期の講義を担当。
- 1995 ノーベル文学賞受賞。
- 1997 『水準器』(*The Spirit Level*, 1996) で、ウィットブレッド文学賞受賞。
- 2000 『ベーオウルフ』(*Beowulf*, 1999) の現代語訳で、ウィットブレッド・ポーエトリ賞受賞。

Synopsis

Seamus Heaney : The Reality in Polyphony

Katusya Hiromoto

Seamus Heaney makes extensive use of language from Anglo-Saxon literature to his indigenous Irish culture so that his poems can be made into the art of polyphonic resonance. In this article I would like to explore the characteristics and core ideas of his poetry.

Concerning the poem titled “Digging,” which seems to be the manifesto of his literary career, people may consider that the word “gun” isn’t well connected to the imagery of the rest of the poem, which describes the work on the potato field and the bogland. Yet, in fact, his father uses a tool which he refers to as “the bright edge” and his grandfather is seen “nicking and slicing” with “the curt cuts of an edge,/Through living roots.” Giving a unifying imagery to the poem, these tools are symbolic of the weapons they wield for livelihood, and in the eyes of Heaney as a small boy his father and grandfather were identified as semi-heroes. Using the “pen” as his means to make a living and to articulate in society, the grown-up poet lives his life in different circumstances from those familiar to his ancestors. Although using different implements, the poet hopes to achieve something heroic by digging the field of literature in order that he may live up to the models,

i.e. his father and grandfather whom he used to find heroic in his early days.

As in this work, the word “bogland” presents us with a key to understand another poem called “Act of Union.” The poet gives us a picture of Ireland’s situation after the law (Act of Union) was introduced in 1800 by England. Not only topographically but politically he depicts the stormy landscape, which gives us an insight into the agony of the Irish people. We can note that his use of language is sensuous, in portraying the political predicament of his home country in a kind of sexual metaphor.

In connection with politics the elegy “The Strand at Lough Beg” claims our particular attention in the way it deals with death in daily life involving the political conflicts. Like Milton’s *Lycidas* this poem asks a question about God’s will and justice, and finally leads to the rebirth of hope and life. However, in ‘Part VIII’ of “Station Island” in *Station Island* his late cousin Colum McCartney’s ghost calls in question the value of the conventional elegy, accusing the poet for the way he composed “The Strand at Lough Beg.” It reminds us of the comments about Milton’s *Lycidas* by Dr. Johnson, who blamed him for creating fiction and lacking in grief.

Considering the above, one can see that Heaney debates within himself and combines the vernacular with the English language. In this way he attempts to redress the imbalance of the actual world, which culminates in the polyphonic use of the language and reveals reality in accordance with “auditory imagination.”